

日本原子力文化の国際化——IAEA 勤務での経験から——

[日本原子力学会誌談話室掲載記事（2003年8月）を転載]

(社)日本原子力産業会議 小西俊雄

1995年から2003年春までウィーンの国際原子力機関（IAEA）本部で勤務する機会を得た。本稿ではその勤務経験の中で感じた、つまり「IAEAの中から」、「日本の外から」見た「日本原子力文化の国際化」について考えて見たい。（写真、旧ドナウ越しに望む国連都市ビル群、左二棟がIAEA棟）



今年5月の原子力総合シンポジウムでも報告されたように、日本での原子力界では、安全に関わる事例が大小を含め、過去10年に集中的に発生している。そして、信頼回復のための情報公開、透明性が議論されている。従来「日本は独自の（国際基準より高い）基準と技術で高品質、高信頼性を追求」する姿勢で来た。まさにそれゆえに他国の範ともなり得る高い性能を実現する一方で、しかもそれゆえに「孤高」で「閉鎖的」な原子力文化を国レベルで、企業レベルで育む遠因になったのではないか。世界の原子力文化に日本の原子力文化を反映させ、それを広げること、そして逆に、国際的に受け入れられている原子力文化を日本に持ち込むことが、昨今の我が国での原子力への逆風を和らげ、社会の理解を得るために重要なシナリオなのではないか。例えば、負荷追従運転の現実性や昨今、話題のプラント維持基準も国際的なプラクティスから「学びあるいは利用し得た」点がもっとあったのではないか。国際会議での発表や招待講演での情報交換で得られる以上の文化の交流、文化の共通化を考えるべきなのではないか。

ビジネスとして、あるいは地球温暖化対策の技術として、世界に貢献するための「輸出」を考える場合にも、「独自の文化」、いうなれば「うちの文化」は通じにくい。輸出を考える時だけ「国際的基準」を勉強するのではなく、海外における原子力文化と調和をとることが重要である。すなわち、設計、QA、運転、保修、廃棄物管理、安全、PA、その他いろんな分野で原子力文化の国際化、つまり共通化、平準化が必要になる。開発途上国が原子力を始めようとする場合、ほとんどはIAEA編集の「基準指針」類を出発点にする。したがって、これらに精通していることが輸出戦術上必要であり有効になる。このことは「日本の原子力文化とIAEA原子力文化との調和」と言って良い。それには文化の輸入と同時に、輸出も重要になる。日本での仕事の経験を世界の原子力文化の方向付けに反映し、そんな人材が視野を広げ、国際社会での人脈を構築することが「原子力の輸出」にも役立つ筈である。G8諸国を始めとする原子力先進国は積極的にIAEAを「利用」している。

周知の通り、IAEAは「アトムズ・フォア・ピース」が礎になって1957年に発足した。最近の世界情勢から、査察に代表される「安全担保」が注目を浴びているが、もう一つの顔「平和利用推進」も重要な柱である。既存技術の性能改善と応用、開発途上国への円滑な技術移転がその中心的活動になっている。発電分野では既存炉の性能向上、信頼性向上、寿命延長、運転管理等での情報交換、将来の方向付けを経験国の参加を得て議論し「指針」的に文書化している例が多い。原則としてIAEAの「指針」類に拘束力はないが、多くの国で参考にされ活用されている。これは、燃料、廃棄物管理や原子力技術、放射線技術の応用分野でも同様である。

それでは「IAEA 原子力文化との調和」を計るためにはどうするか。その最良の道が、日本の原子力文化を背景に IAEA の「指針」類作りに参画することではないかと思う。それも会議で情報を提供し意見を述べるだけでなく、「指針」類作りの計画、実行に担当者として実務に参画することである。ところが現実に IAEA 本部で働く日本人職員は非常に少ない。2003 年 3 月時点の 24 名は G8 諸国の中ではイタリアに次いで下から 2 番目、専門職全職員数の約 3 %に過ぎない。20 %近くの運営資金を分担する日本は代表的なアンダーレプレゼンティッド国なのである。

職員の絶対数の少なさ、とりわけ計画実行を担う中堅部隊が少ないために日本の原子力文化が国際的な場に期待するほど浸透しないように思えてならない。IAEA の活動方針作り、基準・指針類への日本カルチャー反映（ニーズもシーズも）、日本技術への理解、開発途上国への技術広報などは職員の立場で効率的に取組める。活動計画の立案や日本の国情に合う目標アウトプットの仕様作りに参画し、規制や基準の方向性に関する情報に早い段階で関与し得ることとなり、これは日本の原子力に直接的に反映できる利点である。特にエンジニアリング分野、研究応用分野でその必要性が緊急であるというのが私の偽らざる実感である。IAEA の詳細な組織に立ち入る余裕はないが、技術系 5 部局の中で言えばエネルギー局、安全局、原子力科学・応用局である。保障措置局、技術協力局がこれに次ぐ。

もちろん IAEA が「日本原子力文化の国際化」に必要な唯一の組織ではない。他の国際機関や個々の国との二国間関係も重要である。が、国内における原子力文化の再生、将来の「輸出」を考えた国際化には IAEA の「利用」価値を再評価してよいし、世界の多くの国が日本の貢献を期待しているのである。IAEA の場で職分を担うことは原子力の平和利用を国是とする日本の、日本人技術者の使命でもなかろうか。

多くの日本人にとって、ウィーンはイメージの良い場所だから「滞在してみたい」と思う人は少なくないのではないか。その期待は裏切られない。音楽、オペラ、自然、ワイン。生活の質は確実に上がる。が、現実に応募する人は少ない。絶対数の少ない現職員の中では官庁出身が比較的多い。国の研究機関の人もいるが、その多くは査察官である。それぞれ重要な任務であるが、加えて民間産業界からの寄与が望まれる。実力もあるのだし、期待もされている。学会員の中に「期待される人材」が相当数いる筈と信じている。

なぜ応募者が少ないのか。個人としては生活や語学の不安もあるだろう。が、より大きいのは「帰国後の職場」だろうか。しかし、国内では職域経験を広め、人の輪を広げるために「出向」する例が多いし、上述のように日本原子力へのプラスの見返りが期待できるのである。勤務経験は帰国後の業務分野、職域に新しい可能性も与えてくれる。組織としても職員としての応募に積極的な意義を見出して欲しいと強く願う。誌面を割く余裕はないが、生活や語学の問題は心配するほど深刻ではないと言って良いだろう。

私はそこで、「原子力を利用した海水淡水化」という課題で仕事をさせてもらった。人口増、環境汚染、都市化の波で世界の「淡水事情」は深刻化している。無尽蔵の海水から真水を回収する淡水化技術は前世紀半ば実用化され、今ではアラビヤ諸国を中心に定着し必要とする地域は世界各地に広がっている。その海水淡水化にエネルギー源の立場から原子力が貢献する場である。中堅専門職（P5）として、IAEA 活動の計画実行を担当し、開発途上国への技術情報配信、研究計画やプロジェクト計画への支援等を通して経験が生かされたことにやりがいを感じ得たと満足している。平和利用に貢献し得たという充実感もある。

個人レベルで経験した「文化の国際化」にも若干触れておく。私の職場はエネルギー局に所属する原子力発電部原子力技術開発課だった。課長以下の専門職数人の小さい組織だが、秘書職を含めると国籍は十指を超える多様さである。「国連」全体がその名にふさわしい多文化社会である。日本人的「常識」が通用しなかったり、1つの文書に10人以上の決済署名を要するなどの国連文化に戸惑ったり辟易したりもしたが、

異文化との接触は新鮮で楽しくもあった。初めて身近に接するイスラム文化の印象は、アラブ首長国連邦やエジプト、モロッコなどの諸国を公務で訪ねる機会を得てさらに強くなる。これらの地に多い史跡を訪ねる機会も持てた。インドで三蔵法師の歩いた地を訪ね、パキスタンでガンダーラ仏教芸術の香りに接し、中国敦煌で今も臉に残る弥勒菩薩に会えたのも、公務ゆえ国連勤務ゆえの幸運だったと感謝している。異文化に接して「認め合う」大事さを再認識したように思う。知らないがゆえの不安と不信は知り合うことで和らぐのだと。

もちろんウィーンの私生活も充実した質的に満足できるものだった。オペラや音楽には余人ほどの造詣がなく楽しみの幅を狭めたかも知れない。が、ハイキングや山歩きで緑豊かな自然を心行くまで満喫した。近場を主とした週末の近郊ハイキング、夏山シーズンに仲間と出かけたヨーロッパアルプスの山々。美しい山並みや雪と氷の世界が今も忘れがたい。最後の夏となった昨年、モンブラン4807mにも登ることができた。日頃の自由時間には国連内にある幾つかの同好会が友人の輪を広げ、ドイツ語を学ぶ助けになった。

あくせくすることが自然に罪悪視されてくる雰囲気のある社会である。「余裕」ある生活とはどんなものかを実感できた7年だった。勤務時間中は確かに集中し緊張もするが、責任と権限が「適当」だった所為か、日本にいた時ほどのストレスを感じずに公私生活が送れた。「IAEA 勤務」を勧め、後押ししてくれた多くの人に感謝の気持ち強い。公私で得た国際社会の友人、知人は代え難い財産である。そこでの経験、問題認識が帰国後の働く場所と新しい目標を与えてくれた。

ウィーン国連での私の業務は上述のように「水」だった。かと言って、ウィーンに「水問題」がある訳ではない。むしろ逆にウィーンは美味しい水に恵まれている。およそ100km南郊のアルプスから雪解



け水が送水管で運ばれてくる。一世紀余り前までは市民1人当たり1日5リットルの真水しかなく、水洗便所どころか掃除洗濯もままならない非衛生都市だったウィーンが今ではこの雪解け水のおかげで美味しいワインにも恵まれる豊かな街になっている。世界遺産に指定された街並みは文化と芸術にあふれる「生活快適度世界一」と称される都市になった。住んで楽しい町、住めば実に都である。(写真：ウィーンの水源地、朝焼けのシュネーベルク山塊)

「日本原子力文化の国際化」のために国際的な場で働く人、「国連も働く場所としての選択肢」と考える人がもっと居て欲しい、と思う。関心ある会員の為に幾つかの Web 情報を挙げておく。

- IAEA全貌。<http://www.iaea.org/worldatom/>
- IAEA各部局のプログラム内容概要。<http://www.iaea.org/worldatom/Programmes/>
- IAEA空席情報。<http://www.iaea.org/worldatom/Jobs/>
- 一般的な応募要領や要求経験等(国際機関人事センター)。<http://www.mofa-irc.go.jp/>
- 関連支援情報。<http://www.jaif.or.jp/>(原産 HP 充実予定)

IAEA 職員にどんな能力、経験が求められるか。専門分野での実務経験に加えて、マネジメント能力、国際経験、異文化との協調性、良好な人間関係等だろう。国もとの関連情報、専門家情報を集めることも職員に期待される要件である。私の実感では専門分野、マネジメント能力では「普通の日本人技術者」なら

ほとんど適格者である。あとは語学と国際経験である。これも学会員の中には十分適格の人材が多いはずだ。